



第18号

編集発行／碧南市

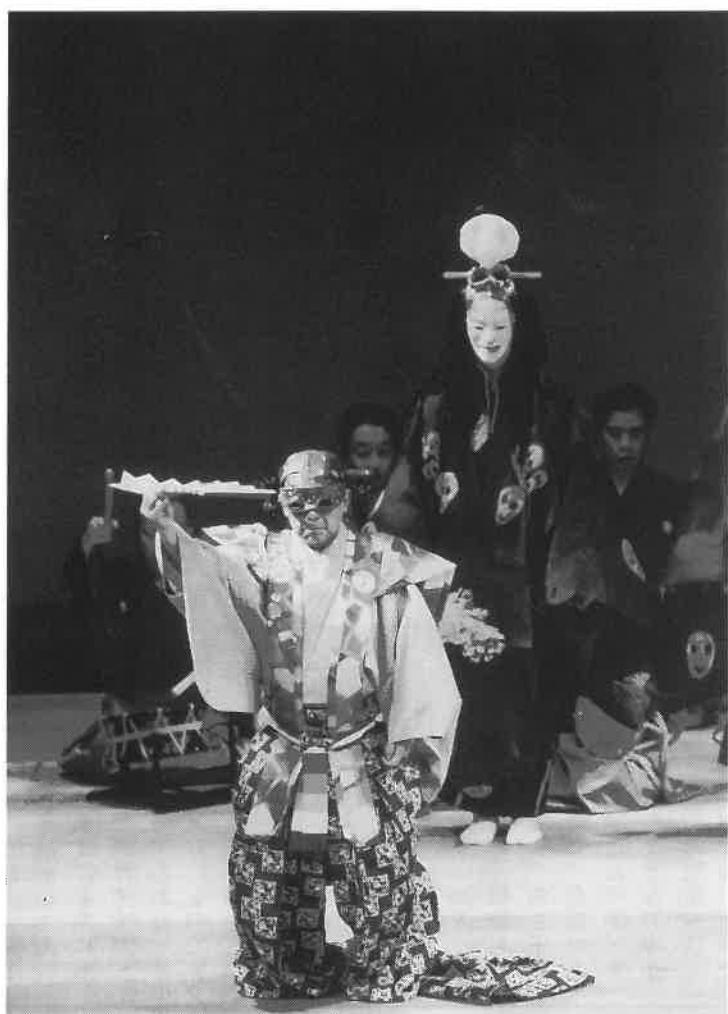
哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761



平成十四年十月十日(木)午後七時より碧南市文化会館ホールにおいて、当苑の開村十周年記念事業としてスーパー狂言「ムツゴロウ」を上演しました。梅原猛名誉村長の原作を茂山千之丞氏が演出、装束を横尾忠則氏が手がけた華やかな舞台でした。

(写真撮影 杉浦清孝 氏)

## 碧南市哲学たいけん村無我苑 開村十周年記念事業

### 第一部 梅原猛名誉村長特別講演 第二部 スーパー狂言「ムツゴロウ」

現在の日本は物質的にはたいへん豊かになり私たちはそれを享受しています。が、地球環境問題等、世界は大きな変換の時期を迎え、高度にシステム化された社会に生きる私たちも何か大切なことを忘れかけていないか、また幸せであるように思っていますが、実はもう一度原点に帰つて自分自身をみつめ直す時が来ている、というようにも思います。無我苑は来苑者が日常の喧騒から離れてみずからを振り返つていただくためのきっかけを今後の運営の中で提供し続け、さらに独創的な事業にも取り組んでいきたいと考えています。

ここでの健康と精神文化醸成の拠点として平成四年六月に開村した「哲学たいけん村無我苑」が十年という区切りをつけました。日本全国に向けて「無我愛」を提唱した伊藤証信は大正十四年にその活動の地を東京中野から碧南市西端に移し、昭和三十八年にこの地で八年の生涯を閉じました。ご遺族より旧無我苑の土地等を市へご寄贈頂いたことから、その利用方法が検討され、現在の無我苑は、静かな環境に身を置いて、心を落ちつかせ、安らぎを得て頂く施設として新たによみがえりました。

**哲学たいけん村無我苑  
開村十周年を迎えて**

最終回  
伊藤証信翁にまつわる  
思い出(座談会)

これは平成十三年三月二十九日(木)、無我苑研修道場で収録されたものです。

座談会 参加者 岡島 良平 氏(お)

神原 純治郎氏(さ)  
杉浦 元 氏(す)

(五十音順)

(司会) そうしますと、あさ子さんはわりとおおらかで明るい方ではなかつたかな。

(さ) 結婚後は、非常に明るくなられたです。人と話すのにいつもここにこ顔、証信先生もそうですね。話されるときはいつでもここにここにこ笑つて話される。つりこまれちゃうんですね。

(す) ぼくはね、偉いと思うのはね、裕福に育ったあさ子さんが、証信先生と結婚せられて、お台所もかなり苦しいものだったと思いませんが、それを突き抜けて自分の真心を、質素な意味におけるところの贅沢、これ以上のお抹茶を出してくれたり、一生懸命乏しい費用の中から立派なご馳走を作つて皆を歓待せられたというところが。我々には見せられないが、随分如意だったと思い……。

(さ) 私も常に感じとったですがね、そういうことはおくびにもだされませ

(す) んでしたね。

(す) そういうことをあさ子さんは実際に行なわれた。無我苑を支えられたことは立派だと思いますよ。頭のことも悟られたんだと思いますよ。当時でいうと、女は黒い髪であつて、禿げてくることは嬉しいことではなかったと思います。失礼なことを言ふと、何回か死ぬような思いをせら

れたと思います、人に馬鹿にされたかただと思います。失礼なことを言ふと、何回か死ぬような思いをせら

だから、家からあまり出られなかつたというふうに聞いておりますけれど。人間は苦しい中で育つていくと

いう手本ですね。

(さ) お二人の出会いはね、伊藤証信先生が、徳山の女学校の先生になつて行かれたんです。生徒がある時、あさ子さんの家に行つて、今度、こういう頭の禿げた、背の低い、非常に優しい声で話される先生がみえた、と話したそ�です。それにあさ子さんが非常に興味を持つてね、面会された、それが結婚のきっかけになつた。

ただな。

(司会) 徳山女学校には四年間おいでだったというふうにあります。非常に厳しい修道生活であったようですが。

(さ) 中外日報の編集長もやられた。中外日報といえば、たいしたものですね。

(お) 西端においてたのが大正十四年だったかね。新しい無我苑は。

(す) 昭和九年にできた。記念会をやつたのが昭和十年だ。

(さ) それまでは竜灯窟という小さな所におられたけれど、昭和八年頃から

二人で相談されて、友人、知人、名士のもとへ、(無我苑)建設したいといつて回られたです。あさ子さん、証信先生、別々ですね。全部で九千八百円ばかり集まつたんです。それで二階付きの御殿のようなお家が

できましたよ。昭和九年に完成です

わ。土地は原田新治君が持つとつた土地で。

(お) 落成式だったか、倉田百三が来て短冊をかいでもらつて、家にありますよ。

(す) 「出家とその弟子」で有名です。

僕は与謝野晶子さんのものがある。

(お) 河上肇も来たよね。

(す) 東京で無我愛を宣伝された時に、直感的に大共鳴されたのかね、自分が持つていて本も全部売つて伊藤証信先生のもとに駆け付けた。その後、あの時本を売らなければよかつた、と述懐されたそうです。それほど無我愛に共鳴された大学者ですね。

おつたけど、どうしても合致しなくて。共産主義、社会主義というものと、無我愛とが、マッチできないと。そういう思想的な意味では二人は別れただけれど、河上博士、皆尊敬したね。伊藤証信先生は、どうしても共産主義、社会主義に賛同することができなかつた。社会主義の河上肇さんと無我愛哲学の伊藤証信さんは思想的に合わなかつた。

杉浦 元氏



河上肇、与謝野鉄幹、晶子夫妻、

右も左も沢山の人が来るから、証信先生が「哲学入門」を出された時も左がかつてしているのではないかといつてとくべつ特高が目をつけた。僕は引つ張られずにすんだけど。だから証信先生が「無我愛の哲学」を出した時に、左じやないかということであり目をつけられた。証信先生が後から出された「日本哲学入門」というのによつて赤じやない、と特高が目を離したというように、僕は警察の裏話を聞いている。かなり右の方になつているから。僕は前に出した「哲学入門」のほうがいいと思



神原 純治郎氏

うけれど。

(司会) 六十歳を過ぎて、五十鈴川など

で禊の修業をなさつておいでですが、

証信先生は神道に興味、関心があつ

たのでしょうか。

(す) 大政翼賛会の禊があつて、僕もやつ

た。原田新治君も入つとつた。大政

翼賛会の推進委員とか翼賛壯年団と

か、そういうのやつたもんだから。

(お) 榊原先生は証信先生とはいつ頃か

ら。

(き) 大正十四年の秋の夜、竜灯窟にお

いでのころにはじめてお伺いしまし

た。

(お) わしは、一番よく行つてお目にか

かつたのは旧い方の無我苑で、その

頃からあさ子さんは茶碗を作つて釜

で焼いた。

(き) 竜灯窟には、何人くらいおられた

のですか。七、八人?

(お) もう少しおつたかな、十人くらい

か。

(き) そんなにおつたですか。

(お) 「無我愛」という新聞は西端にお

いでても出しとられたかな。

(す) 慶爾さんが編集しておいでた。僕

がよく見たのはペラペラのね。

あと、満州に三回くらいお行きになつた。

建国大学で講義をせられた

ですね。戦時中のことです。

(き) あれにだいぶ力を入れておいでで

した。広島で会議があつて、ご夫妻

でお行きになつたですね。私はその

時の系譜をいただいて、まだ持つて

おります。

(お) あの世界連邦は、あれでどうなつ

ちやつたの?

(さ) あの会議以後は、たいしたことな

かつたですね。証信先生はご熱心で

したね。

(お) 実現となると、なかなかね。

(さ) 「無我愛」(機関誌)は、手元の

本で見るが、明治三十八年から始まつ

て、ずっと続いて、何回か途中で休

刊して。

(さ) 名前も三、四回変わっています。

(お) 昭和三十四年に休刊、発刊より五

十五年で二六六号。五十五年かかつ

て二六六号しか出ておらん。何回か

休んでおる。

(す) 無我苑として休刊したのが昭和三

十四年か。

碧南には清沢満之さんがおつたで

しょう。満之さんの仲間に佐々木月

樵、そして佐々木上宮寺から嫁さん

をもつたのが暁鳥敏。暁鳥さんは

若い頃には随分乱暴だった。自分の

お寺の本堂から真っ裸、ふんどし一

つで出てくる。晩年は眼が見えなく

なつて、とても穏やかになつて。

(お) あれで穏やかになつたのかな。

(す) 暁鳥敏さんは、こげな坊主がある

かと思うくらい魅力的だった。恩師

である清沢満之さんの墓に参つて、

奥さんの在所である佐々木の上宮寺

でお参りして、安城の駅の北に説教

所があつて、ここで講義をしておつ

た。その講義を、僕は学生時代の夏

金沢のお寺さんだ。

(お) 清沢満之の三羽鳥というのが、暁

鳥敏と佐々木月樵と多田鼎。

(す) 清沢満之は、日本で有名になる前

にアメリカで有名になつた。早く死

んでしまつて、生きていれば、よほ

どか世界のためになつたのに。

(お) 明治三十六年、三十九歳ですね。

丁度、正岡子規が三十五、六で亡くなつたでしょう。

(す) 今の松山で、正岡子規は夏目漱石

と友達だつた。漱石には、「我輩は

猫である」「坊っちゃん」「虞美人草」つ

ていうような有名な小説がある。

(お) 「我輩は猫である」というのは、

俳句の雑誌の「ホトトギス」に載つ

た。ここで連載して、大評判になつ

ちゃつたんだな。ここに出てくる津

田青楓といふ絵描きは、よく漱石の

本の装丁をやつた。

先生に相談されて、市に寄付され、

今は無我苑ができた。

(さ) それは昭和六十三年十一月、秋の

ある日のことでした。まち子さんか

ら電話がきました、私はすぐお伺

いしたんです。そうしたらまち子さ

んがですね、無我苑は全国の知人、

同志によつてできたものである、こ

れを私してはいけない、社会に還元

せよ、というのが証信先生のご遺言

だつたと、そう言われたです。

それで、すぐ考えたんです。先生

の心の内は、よく分かつた、じやあ

この無我苑を西端地区に寄付するか

市へ寄付するかと、一時間半まち子さんとお話ししたんです。

考えてみれば、これだけのものを地

区が維持運営していくのは大変じや

ないかという話になりまして、それ

では市へ寄付することにしましたよ

うと決定したんです。

二、三日たつて、私は、市の総務部長さんだつたでしようか、久田昭一さんに、こういうわけで市に貰つてももらえないかと話をしたんです。

そうしたら平成元年の一月十日、ま

ち子さんと二人で市役所に来てくれ

と言われて出掛け、市長の応接室で

無我苑を市の所有にするために、三

人の職員で一時間ちょっとで書類を

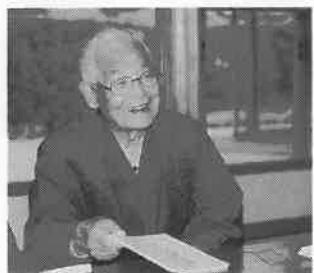
作ってくれました。これが、無我苑

の市への寄付の顛末です。

私が今一つ思い出すことは、あさ

子さんのお声が綺麗なこと、他には

全然知らないです。対談して、話さ



岡島 良平氏

(す) 津田青楓さんは、旧無我苑ができ

た時に、自分の絵の領布会をして、

無我苑に協力せられた。

れるのをじっと聞いていると、実際に美しい、濁りのない、澄んだ本当に綺麗な声でしたね。自分は、いまだにの方以上のお声を誰からも聞いていません。

(す) 頭が良くて、体格がわりにしつかりしておいでた。

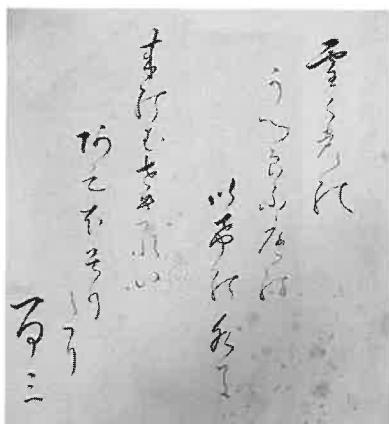
(お) そうだね。



(お) 見世物になつて中村久子さんをこつちに連れてきて、無我苑があつたから、久子さんが有名になつた。涙ができるおつたね。私は自分が五体満足で八十六まで生きとることを、本当に感謝せんといかんと思うね。

ここにいる三人を除いて、当時無我苑に出入りしとつた人は、ほとんどいなくなつちやつたね。僕は思うね。人間は亡くなる、伊藤証信先生に言わせると、新生だとおっしゃる。昔の言葉で、往き生まれる、往生だと。だけど、その正しい気持ち、純粋な無我苑の気持ちは、僕らが死んでもこの碧南市で継いでもらいたいと思うな。

(おわり)



西端の無我苑建設記念講演の際の色紙。  
倉田四十四歳。ゆつくりと慎重な筆致を  
思わせる。

百三

多た阿あ来き以い宇字雪  
利り之し能の希け川久く良ら裳も  
本ほ武む能の不ふ能の  
曾そ左き水み庭お能の  
利り遺れ礼れ爾能の  
八ば



西洋哲学の講義をした源流をうけつぎ、現在は広々とした畠の和室で小鳥のさえずりや庭園の静けさを傍らに、様々な世代の方々が聴講しておいでです。十五年度は「ソクラテス」をメインテーマに、六月七日(土)から毎週土曜の四週連続で前期哲学講座を開講します。どなたでもご受講できます。また同年度の新規事業に聞香の体験講座、「自分探し」をテーマにしたエンカウンター・グループ(二泊三日の研修)を予定しています。

本号で「伊藤証信翁にまつわる思い出(座談会)」の連載を終わります。次号では昭和三七年春、桜桃会での苑主最後の講演「人間は死んだらどうなるか」についてを講演記録テープをもとに掲載します。

### 伊藤証信の遺品

大正・昭和期の劇作家・評論家である倉田百三(一八九一~一九四三)は大正四年十二月下旬、京都で西田天香に会い、一ヶ月間へ一燈園で思索生活をしていました。西田を親鸞のモデルにして書いた戯曲「出家とその弟子」で一躍有名になりました。倉田は、機関誌「無我愛」に度々寄稿し、西端の無我苑建設記念講演会(昭和十年一月二七日)で講演(演題「活ける信仰と歴史の浄土」)をしていました。生涯を病気と闘いながら創作活動を続け、五十二歳で没しました。



◇かわら版第十六号掲載の「伊藤証信翁にまつわる思い出(座談会)第三回」中に、(養女の)あけみさん  
↓(長女の)あけみさん  
あけみさんは、代用教員の資格があった  
↓教員の資格があった

の誤りでした。関係者の皆さまに謹んでお詫び申し上げ、訂正いたします。

◇平成十四年九月三十日の夜、伊藤証信氏の長女伊藤まちさんがご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

◇無我苑では前期・後期の各期四講座の哲学講座を開き、久野昭先生(国際日本文化研究センター名誉教授・無我苑顧問)にオブザーバー、講師を担当していただいているります。その昔、苑主伊藤証信翁が旧無我苑の研修道場で、ドイツ語や東

### 編集室より